薄氷

氷室のおもものたるねど、今日
しも物の底より見出でたる
薄氷の一綴に、とる手珍らし
かなりや、つらなる人の半ばは
世にきらで、たゞく残る数
にしも、老の名の交じれるも、
なかくに果てなくもいとあじ
きなし、これ書きたる駿河守
重信の大人も、今は世にあら
ぬよ、いにし文化の十とせ

あまり　それの春　若きおの
友どち、白川の花の元にて、
歌結びせられたるが、いと
うらやましくて、女どちもして
みむとて、詠みつつしるに、人の
数(かず)をへ　足(た)らざめれば、さながら
めめしう　いと　さうくしければ
隔てぬかぎりを　一人二人やとひ
そへて　師の君のやどりいませる
鴨河のほとりに　うちつどひて、
折からなる千鳥に　雪に　名所の
桜を加へて　その三つの題をしま

県立図書館

三十まり三つ 番(つがひ)にしらべ
詠へてなり、今し思へば
おこなるわざなり、光なる
おの友のは、早く梓(あづさ)につきて
世に散ばふめ そのなみならぬ
浦回(うらわ)の藻屑(もくず)どもは さてもて
朽ちなむ、それ選(えら)りわけて
ひろひ玉へりし詞の玉のともに
うもれなむ、はたあたらしう
口おしければ、残りたる友垣
に許りて 世に広めむと
思いきり、書記

この重信の書きすてられし
水茎をそのまま えろせて
このつらの人どもにながき
形見のしのぶ草 かつは手向草
とも かりつめなれは 後の世さまに
汐みたる 延虫の すさびの
しれわざなりけらし

天保の三とせみな月の
はじめの日
禅尼 嘯月しるす

立図書館

猶以余寒折角申厚
被遊候儀奉預候
令恐申側向へ
宜謝預上候一一夜
明候得共参府近
寄無拠兼預迫
相楽奉待上候
以上